

トピックス

肉芽組織と再生医療

奥羽大学歯学部口腔病態解析制御学口腔病理学分野 伊東 博司

今年4月、私が肉芽組織^{にくげ}について3年生に講義したあと、「肉芽組織は人間にとって有益なのか、有害なのかよく分かりません。」という疑問をある学生が投げかけてきました。肉芽組織とは「何らかの病的現象のあとで、新しくできてくる、毛細血管の多い結合組織」であること、肉芽組織は時間の経過とともに線維化^{せんい}が起こって線維性結合組織となり、さらには癬痕組織^{はんこん}に変わること、そして、肘や膝にしばしば見られる傷跡が癬痕組織でできているということを、私は毎年3年生に教えています。肉芽組織の意義について疑問を發した学生は、肉芽組織は創傷治療では役に立っているが、肉芽組織は傷跡となって審美性を損なうので、結局のところ、肉芽組織は有害だと思っているのではないかと推量した私は「肉芽組織が役に立つか、立たないかはその人の見方によるな」という、いいかげんな答えでその場を何とかしのぎ、そのあと、肉芽組織の益と害は哲学の問題になるのかもしれないと思っていました。

学生の質問を受けてから1か月後、書店で偶然見つけて買った雑誌に、哲学者の小泉義之が書いた「傷跡と再生」と題する論文¹⁾がありました。著者の小泉は3部からなるこの論文の第1部で次のように述べています。現在の再生医療の実情は失われた生体組織を元どおりにすることではなく、新たなもの、例えば幹細胞を補充して、残存する生体の構造形成を誘導し、残存する生体の機能を増強することである。この再生医療の実情から着目すべきことは、再生医療が現に達成している成果について十分な解析がなされておらず、再生医療に関する謎が多いことである。再生医療で重要なのは、それらの謎によって掻き立てられる夢を冷徹に堅持することのみではないだろうか。

次に、この論文のおおよそ半分を占める第2部で小泉はまず、細胞の変性(degeneration)とは正常の細胞発生・分化過程からの病的逸脱であり、そのような変性に陥った変性細胞を正常な発生・

分化の階梯に引き戻すことこそが、再生医療が目指すべき目的となるはずだと言います。このあと小泉は、神経学者カハール(Cjal: 1852-1934)の思考を説明していきます。中枢神経が再生不可能であるとカハールが判定したのは、中枢神経でも再生現象が起こるものの、その再生は僅かな期間で終わることを見いだしたからである。ではなぜ、中枢神経の再生が一過性となるのかをカハールは考察し、そこから再生について夢想した。すなわち、未来においては、ごく短期間の再生を延長、増強し、正常な神経回路を再構築できるのではないかという夢をカハールは紡ぎ出した。カハールの夢は実現されつつあると言えようと小泉は述べて、第2部を締めくくり、さらには、カハールの夢を超えた再生の夢想があると指摘して、第3部に繋げていきます。

おしまいの第3部で小泉は、出来上がってから時間が経った肉芽組織にも起こる癬痕化と再生医療との関連について、腎臓の線維化についての概説論文²⁾の緒言を引用しつつ論考し、肉芽組織の究極の形態である癬痕組織を人為的に制御することこそが、カハールの夢を超えた再生医療の夢想であり、これを「傷跡の再生」と呼ぶべきであると断言しています。結びでは、「傷跡の再生」とは復活(Resurrection)に相当し、再生医療が遠望する復活は、生体の外部から到来する救済ではなく、人間の内部で発見されるべき救済であると述べています。

肉芽組織について学生が抱いた疑問が哲学に関連していることを、今回紹介した小泉論文で知ったとき、私はその学生に感心しました。

文 献

- 1) 小泉義之：傷跡と再生. 現代思想(6月臨時増刊号) 45(9)：188-194 2017.
- 2) 久間昭博, 田村雅仁, 尾辻 豊：腎線維化の機序と治療. 産業医科大学雑誌 38(1)：25-34 2016.